

子どもが生きる学習環境

－“生きる力”今、「学習環境」を問う－

本校では、日頃の教育実践を3年に1怒、著書にまとめ、世に問うています。今回は、「子どもが生きる学習環境」について考えてみました。人は自然の恵みの中で生き、多くの人々とのかかわりの中で生きています。自然と上手につき合うことができたり、年齢の違った人々、立場の違った人々とコミュニケーションが上手に取れたりしたら、どれほど素晴らしいことでしょうか。私たちは、こうした生きる営みの中から新しい発見をし、新しい対応をしています。自己を取り巻くあらゆるものとのコミュニケーションが、今まで以上に大切なってきています。国際化、情報化、環境問題、心の問題…といったことばも、そうした営みの中に吸収されるのではないかでしょうか。子どもたちが本来持っている様々な個性と、個々の子どもたちの思いが有機的に混ざり合った生き生きとした姿を求めて…。

今回の研究の基本的な立場として「子どもの主体的な学習には、学習者が直接かかわっていく学習対象と人的環境、物的環境、文化・風土的環境の4つの学習環境が必要である。」と考えました。学習環境は、個々の子どもの資質・能力を発揮し、高めていく大切な場です。そして、子どもが常にかかわっていくのが学習対象（学習内容・学習方法）であり、そのかかわりの手助けをしてくれるのが、人的環境、物的環境、文化・風土的環境であると広く考るるようにしました。それぞれについては、本論で明らかにしますが、1つ本研究の特徴を紹介しますと、文化・風土的環境があります。それは、そこにしかない独特の雰囲気、また、取材相手に会って肌で感じるようなものです。この文化・風土的環境により、子どもが意欲的に活動を繰り返し、学習対象が持つ素晴らしい実感していくことになるのです。

本校では、「新しい学力観」に基づいた授業の実践が緊急の課題として求められて以来、それぞれの子どもが自己実現をはかることができる授業のあり方を模索してまいりました。それは、子ども一人一人が持っている資質・能力を十分に発揮し、学習対象とのかかわりを独自にふかめさせながら自己のよさや可能性を伸ばしていくという授業です。このような授業を私たちは「支援システムによる授業」と名づけて実践してまいりました。平成8年6月に開催いたしました研究発表会では「自己の可能性をひらく子どもを育てる教育活動～学習対象の特性にふれる具体的方策を求めて～」というテーマで、すでに発表しております。

なお、本著は本校の研究同人のみの実践によって行われたものではありません。この書物が刊行される迄には、多くの方々の激励や支援があったことを申し添えておかなければなりません。全体講師の大坪先生には、これまで熱心なご指導を賜ったばかりでなく、研究の基調となる論考をお寄せいただきました。また、大学のその他の指導教官の先生方のご支援はもちろんのこと、本校の先輩の諸先生方のご支援も、また、並々ならぬものでした。そして、このような研究が陽の目を見ることができましたのは、明治図書出版の江部満氏、樋口雅子氏のお二人の心温まるご配慮があったからあにほかなりません。

このような多くの方々のご支援により、本著が出版できますことに心から深い感謝の意を表します。

平成9年3月

福岡教育大学附属久留米小学校

校長 片山 智士